



《蔓梅擬に目白図》 鶯卿

2. 鶯卿筆《蔓梅擬に目白図》

蔓梅擬に目白図（図版Ⅲ） 鶯卿（生没年不詳） 19世紀

絹本着色・掛幅 1幅 法量96.2×33.6cm

落款「鶯卿女筆」

印章「海棠主人」（朱文壺型印）

実をつけた蔓梅擬つるうめもどきに愛らしい二羽の目白を添え、晩秋から初冬にかけての季節感を表している。蔓梅擬のほとんどの実は割れて果皮の中から種子が顔をのぞかせ、その黄色や朱色が葉や目白の緑系の色と鮮やかな対照を見せている。二羽の鳥のうちの一羽が逆さま状態の、おそらく実をついばむとき以外はとることはなさそうな、不自然なポーズで描かれたのは、二羽に形の変化をつけるためであろう。

作者・鶯卿（生没年不詳）に関する情報はひじょうに少ない。そうした中で、同時代の漢詩人・菊池五山（1769-1849）の『五山堂詩話補遺 五卷』（天保3年=1832刊¹）の下記の記述は貴重である。

「鷗嶼有妹 名鶯卿 字春葩 號海棠庵 才藝殊絶」

鷗嶼おうしほ、つまり江戸浅草蔵前の札差・守村抱儀（1805-62）の妹で、名を鶯卿、字を春葩、号を海棠庵と言ひ、才芸に秀でた女性であったと評され、「画梅」と「遊金澤」の七言絶句が載せられている。同じ『五山堂詩話補遺 五卷』によると、兄・抱儀は当時の江戸でも有数の蔵書家として知られ、十万巻にも及ぶ書を所有し、書画、作詩等に長じていたとあるので、鶯卿の作詩はそうした家庭環境によって培われたものであろう。

鶯卿は天保3年（1832）に『女百人一句』前篇を刊行している。後水尾天皇の第八皇女・朱宮（緋宮）光子内親王（1634-1727）を筆頭に、百人の女性の句を集めたもので、その中に登場する女性たちの居住地は三都ばかりでなく名古屋、肥前、伊勢など広い範囲に及び、妻女、尼、遊女など身分・境遇もさまざまであった。「近世女性俳諧書年表」によると²、17世紀後半から19世紀後半に女性によって出版された俳句の選集は百冊近くに上り、さまざまな女性たちが俳諧を楽しむだけでなく、出版物を刊行していたことがわかる。そうした豊かな江戸時代の文化を背景に『女百人一句』も刊行された。

『女百人一句』に序を寄せた秋香亭去留とは、因幡国鳥取藩の支藩・若桜藩（旧鳥取新田）の第五代藩主・池田定常（1767-1833）のことで、号を冠山といい、松平冠山と呼ばれることもあった。学問や文芸にも造詣が深く、享和2年（1802）家督を長男に譲って隠居した後には、佐藤一斎（1772-1859）・林述斎（1768-1841）・谷文晁（1763-1841）などの江戸の学者と広く交流したと言われている。おそらくその頃に守村抱儀・鶯卿らとも知り合いになったものと思われる。抱儀は文政7年（1824）頃に池田定常が編んだ、幼くして亡くなった娘・露姫のための追悼集にも一句を寄せている³。なお、序で鶯卿は海棠主人という号で呼ばれ、古い句集を紐解いて句を選んだという編集のいきさつも説明されている。

跋を書いたのは俳人の小沢何丸（1761-1837）である。彼は文政2年（1819）信濃から江戸へ出て、守村抱儀の援助で俳諧の宗匠となったと言われている。鶯卿は早くより何丸から俳諧の指導を受けていたらしく、跋には、九歳の時にすでに句会の判じ役を立派に務め、その後、銅駝御殿（二条家）から認可されて宗匠となったこと、彼女が莫愁庵という号を用いていたことなども書き記されている。なお何丸と抱儀が編んだ『江戸浅草月並句合』（文政7年=1824刊、早稲田大学図書館蔵）には鶯卿の句が多数入り、巻末に抱儀の絵が載せられている。

版下の書を担当したのは、桃磯漁者こと守邨喜三郎（生没年不詳）である。『江戸現在廣益諸家人名録 初編』（天保7年=1836年序）によると、彼は蔵前ハタゴ町に住み、名を祭、字を鮮夫、桃磯のほかに長茶子という号を持ち、書画に秀でた人物であったらしい。守村姓を名のっていることから、鶯卿の夫（婿養子として守村家に入った）と推定されている。

兄の守村抱儀は、名を約、字を抱儀といい、鷗嶼のほかに、松篁、翠山房などの号があった⁴。『書畫薈粹 初編』しょがわいすい

(天保3年=1832年刊)には、書を中村仏庵(1751-1834)に、絵は酒井抱一(1761-1829)に学び、そのほか俳諧、茶道、聞香、活花などの諸芸を広く嗜み、十萬巻の蔵書を有していたと記されている。現在知られている下記のような絵画作品はいずれも抱一以降の琳派風で、句や詩の自賛を伴うものもある。

- ・《烏瓜葛花図》(東京国立博物館蔵)
- ・《紅葉図》(足立区立郷土博物館蔵、句賛)
- ・《菊に流水図扇面》(東京・太田記念美術館蔵)
- ・《紅梅図扇面》(『國華』第881号所載、詩賛)
- ・《鶯図》(東京藝術大学大学美術館蔵、句賛)

鶯卿もこうした兄に倣って抱一画風を学んでいたことは、本図からもうかがうことができる。蔓梅擬と目白の取り合わせは、酒井抱一下絵・原羊遊齋作《蔓梅擬目白蒔絵軸盆》(東京都江戸東京博物館蔵、文政4年=1821年春)の先例を踏襲したものである⁵。同軸盆付属の江戸の材木商・森川佳統宛の抱一書簡によると、この軸盆は森川家本家が所有する狩野彰信筆《江都四時勝景図巻》二巻(文化13年=1816年作、東京都江戸東京博物館蔵)を載せるために誂えられた特注品で、当時の江戸の豪商たちの間における抱一と羊遊齋の人気的一端をうかがわせている。鶯卿もこの軸盆を実際に見る機会があり、その時の感激が本図制作の契機となった可能性もある。同軸盆のための抱一の下絵(東京都江戸東京博物館蔵)と比べると、蔓梅擬の実の細部描写にいくぶん自然観察の甘さがあり、抱一の蔓の巧みな構図に対してやや淡白になっているが、それが逆に画面に瀟洒な趣を醸し出している。抱一の《十二ヶ月花鳥図屏風》(東京・三の丸尚蔵館蔵)十月に描かれている目白とは、細部まで実によく似ていて、鶯卿が抱一の描写法を真摯にかつ忠実に再現していることがわかる。総じて鶯卿の描写は丁寧であり、細かな部分まで入念に仕上げられていて、兄の《烏瓜葛花図》と比べても、彼女が繊細で細やかな感受性の持ち主であったことが想像される。

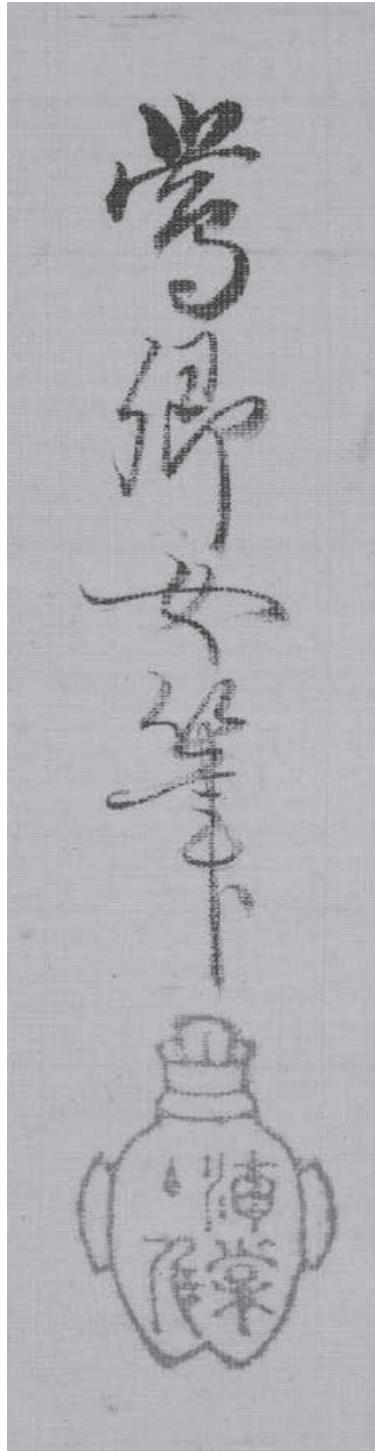
ところで、弾けた実を多くつける蔓梅擬(晩秋から初冬)に青々とした葉をつけるのは、季節的に見てやや不自然なように思われる。ここには抱一の弟子・鈴木其一(1795-1858)の作品からの示唆がある。其一は秋に返り咲いた桜花の枝に二、三枚ほどの紅葉を添えた構図を好んで描いた⁶。蔓梅擬の枝に付けられた二枚の葉は、其一のそうした構図を真似て、色彩の対比をより鮮やかに演出したものと思われる。ただ、其一は同一季節を表しているが、鶯卿の作品では季節的には齟齬が生じている。

「鶯卿女筆」の落款に「海棠主人」の朱文印を捺す(挿図)。印章の形は特異で、鼻煙壺のようにも見えるが、特定できなかつた。

(実践女子大学文学部美学美術史学科 教授 仲町啓子)

註

- 1 刊行年は掛斐高『江戸の詩壇ジャーナリズム―『五山堂詩話』の世界』(角川学芸出版、2001年)に拠った。
- 2 別所真紀子『江戸おんな歳時記』(幻戯書房、2016年)に所載される。
- 3 中村玲氏の御教示による。なお、同追悼集には「女百人一句」の跋を書いた何丸の追悼文と一句も載せられている。
- 4 『江戸當時諸家人名録』(文政元年=1818刊)による。
- 5 岡野智子「酒井抱一下絵『蔓梅擬目白蒔絵軸盆』をめぐって―画家・蒔絵師・豪商の接点」(『東京都江戸東京博物館研究報告』第1号、1995年)。
小沢弘「酒井抱一下絵・原羊遊齋作 蔓梅擬目白蒔絵軸盆」(『國華』第1440号、2015年)。
- 6 たとえば《桜花返咲図扇面》(京都・細見美術館蔵)。



挿図 《蔓梅擬に目白図》落款・印章